# 山梨県立大学との連携講座の成果と課題

山梨県立身延高等学校　川崎　義碩

## 1　平成 29 年度高大連携講座の概要

### （1）昨年度までの反省と今年度の目標

平成 27 年度の高大連携講座では、「心のユニバーサルデザイン」というテーマの下、「旅行コースの企画」、「情報発信」、「ユニバーサルデザイン」、「防災体制」を中心とした政策を身延町の観光事業に提言した。翌 28 年度の活動では、県立大学地域交流センター長の二戸麻砂彦教授、兼清慎一教授、吉田均教授らの協力を得て、前年度の提言を具体的なアイデアとして提案することに挑戦した。長期に及ぶアイデアの検討および集約作業の結果、最終的に「QR コードおみくじ」、「QR コードゲーム」、「動画」の 3 つの活動にテーマが絞りこまれた。「QR コードおみくじ」と「QR コードゲーム」に取り組んだ背景には、身延町には身延山や富士川クラフトパークをはじめ多くの観光資源とそれらを紹介するウェブサイトが存在するのに、両者を媒介する効果的な仕組みがないという認識であった。また、「動画」に関しては、「みのぶでできる 100 のこと」という既存の動画紹介ウェブサイトが身延町によって運営されているものの、高校生目線でより魅力的な動画を作ることができるのではないかという考えがあった。28 年度の成果は、同年度の活動をベースに参加した内閣府主催による「地方創生☆政策アイデアコンテスト 2017」（2017 年 12 月 16 日に東京大学にて実施）での表彰という結果に表れた。SKY（身延高校高大連携講座参加生徒のチーム名）は高校生以下の部で全国 321 チームより最終 5 チームに選出され、「チームラボ賞」という協賛企業賞を受賞することができた。特に、RESAS（地域経済分析システム）の統計データを用いて峡南地域の活性化に向けた活動を考え、何よりそれらを実際に行動に移していた点が大いに評価された。

現在、身延町は、少子高齢化、過疎化、人口流出など困難な問題を多く抱えている。それら諸問題について学んだ 28 年度、SKY の生徒は地域振興に関する知識・技能を習得するなど多くの貴重な経験を積んだ。とりわけ、活動を通して、高校生でも地域貢献ができるということを強く実感できた意義は大きい。文部科学省は、今、グローバル化、技術革新、生産年齢人口の急激な減少など予見の困難な時代の中で新たな価値を創造していく力を育てるために高大接続改革に取り組んでいる。それらは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜を三位一体的に改革することで進められる。高大連携講座は、諸改革の中で重視されている「主体的・対話的で深い学び」を実践するという趣旨を体現する活動である。今年度も、人材・制度の両面で恵まれたこの講座を最大限活用し、生徒の知識・技能を増やしながら主体的に行動できる人材を育成していきたい。

（２）今年度の取り組み

参加者は、昨年と同様に希望者を募集するという形式を踏襲した。卒業や学業への専念などの理由で、昨年度のメンバー6 名が SKY を離れたが、今年度は 1 年生 1 名、2 年生 2 名の新メンバーを加えた合計 9 名（1 年次 1 名、2 年次 6 名、3 年次 2 名）でのスタートとなった（最終的には 8 名になった）。県立大学からは、昨年度から引き続き、二戸麻砂彦先生と兼清慎一先生が主として指導の任に当たってくださった。

今年度のテーマは、一連の意見集約作業を経て、28 年度の成果を継承・発展させていくこととなった。しかし、年度当初は、昨年度のテーマに縛られずに新規テーマを開拓することを目指していた。その理由として、長期的な分掌の運営を考えて、発足 2 年目の業務を軌道に乗せるという意図があった。しかし、年度が始まって早速、担当職員 3 名の内 2 名が入れ替わり、昨年度の課題であった「誰でも担当できる分掌」の実現に取り組まなければならなくなった。そのため、今年 1 年は次年度以降につながる運営モデルを作るという意味で、新規活動テーマの選定、テーマについての活動や調査、まとめ、発表といった一連の活動を実装することとになった。ただ、昨年度大きな成果を残した QR コードおよび動画の両企画を完成させたいという強い思いを持つ継続メンバーも多く、数ヶ月の意見集約の期間を経て、最終的に上記のテーマに落ち着いた。

再度今年度の取り組みを整理する。29 年度は、前年度取り組んだ QR コードを利用した身延町の観光促進、および高校生目線で身延町の魅力を PR する動画の制作という 2 つの活動に取り組んだ。加えて、運営面では、生徒の希望や身延町の実情を勘案しながらも、担当職員の配置換えによる影響を受けない持続可能な講座運営を行うことも併せて目標として設定した。次章では、今年度の活動の変遷を見ていく。

## ２　各講座の実施内容

### （１）第１回　４／１９（水）

ア 授業のテーマ　　【オリエンテーション】

オリエンテーションでは、まず高大連携講座の趣旨を確認することを目的とした。また、昨年度以前との大きな変化として、平成 29 年 1 月に山梨県立大学との間で締結した

高大連携事業に関する協定によって、国際政策学部に加えて人間福祉学部や看護学部にも連携の対象が拡充したことも確認した。この協定によって、社会科学分野に限定されない様々な分野や形での「地域貢献」の在り方が可能になったからである。

イ おおまかな授業の流れ

①職員・生徒自己紹介

②年間行事予定

ウ 授業の概況と生徒の様子

最初に、本年度高大連携講座を担当する身延高校の教員を紹介した。継続生も多い中、3 名中 2 名の職員が入れ替わったことで、少なからず驚いたり戸惑ったりする様子の生徒もいたが、3 名の新規生を迎え、新鮮な雰囲気の中でオリエンテーションを行うことができた。自己紹介の中で、新規生には講座に参加しようと思った動機について話してもらった。新規生の動機は多様であり、「講座の内容に興味を持った」、「担任の先生に勧められた」、「なんとなく」などがあった。継続生には今年度取り組みたい内容について話してもらい、「引き続き動画制作に取り組みたい」、「何か新しいことに挑戦したい」などの意見が挙げられた。昨年度よりも人数は 3 名減少したが、和やかなスタートを切ることができたと感じる。最後に、「30 年後の地域を想像しよう」という内容の課題を課した。

エ 大学教員のアシスト状況

事前の打ち合わせで、昨年度の課題を踏まえて、高校大学双方にとって持続可能な形での講座運営を行うことを念頭に置き、昨年度までの成果を継承していくのか、または全学協定を活用して新しいテーマを開拓していくのかを考えてもらいたいという要望をいただいた。

**（２）第２回　４／２７（木）**

ア 授業のテーマ　　【街の高齢化】

一昨年度の二宮先生の講義を参考にして、超高齢化や過疎化という身延町の置かれた厳しい社会経済環境を理解することを目的に講座を行った。漠然と生徒が感じている身延町の危機的現状を具体的な数値で理解させることに注意した。そして、このような身延町の未来予想図の中で、なぜ高校生が立ち上がらなければいけないのか、また、高校生として何ができるのかを考えさせるように工夫をした。

イ おおまかな授業の流れ

①講義「街の高齢化」　　講師：近藤　学　（身延高校）

②討論　　司会：近藤　学　（身延高校）

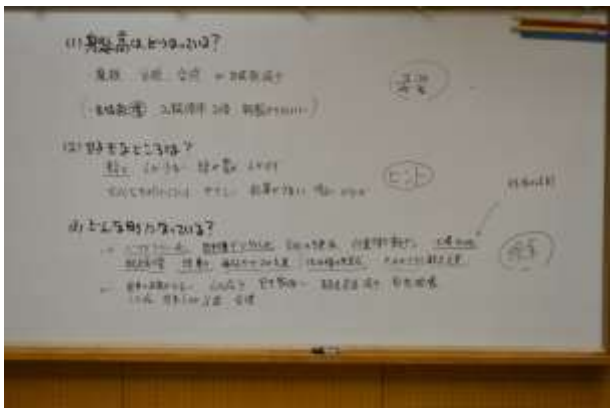
ウ 授業の概況と生徒たちの様子

ほとんどの生徒が、身延町の将来に対して楽観的な予想を立ててはいなかったが、2060 年に身延町の人口が 75%近く減少するというデータには、新規生だけでなく新規教員も衝撃を受けていた様子であった。講義後には、前回課された「30 年後の地域」について

の討論を行った。30 年後の身延町のプラスのイメージとして、現在身延中学校で取り組んでいる教育のデジタル化・IT 化が更に進展するだろうと述べる生徒がいた。マイナスイなイメージとしては、人口減少による空き家や鳥獣被害の増加、電車などの公共交通機関の運行本数の減少などが挙げられた。また、中部横断自動車道の開通にともなう工場の新設や観光客の増加、リモートワークの普及に「期待」を寄せる生徒もいた。

エ 大学教員のアシスタント状況

一昨年度の二宮先生の講義を参考にし、身延高校教員が講義・運営を行った。



（３）第３回　５／１７（水）

ア 授業のテーマ　　【SKY2016 の活動報告と今年度の事業案を考える①】

実際に生徒が今年度取り組む活動について具体的イメージを膨らませるため、継続生を中心として昨年度 SKY2016 が取り組んだ 3 つの活動（QR コードおみくじ、QR コードゲーム、動画）を紹介してもらった。

イ おおまかな授業の流れ

①講義 1 「SKY2016 の活動報告」　　司会：川崎　義碩（身延高校）

発表：對島　琴梨、藤田　哲平、深澤　圭（継続生）

②講義 2「今年度の事業案を考える①」司会：川崎　義碩　（身延高校）

ウ 授業の概況と生徒たちの様子

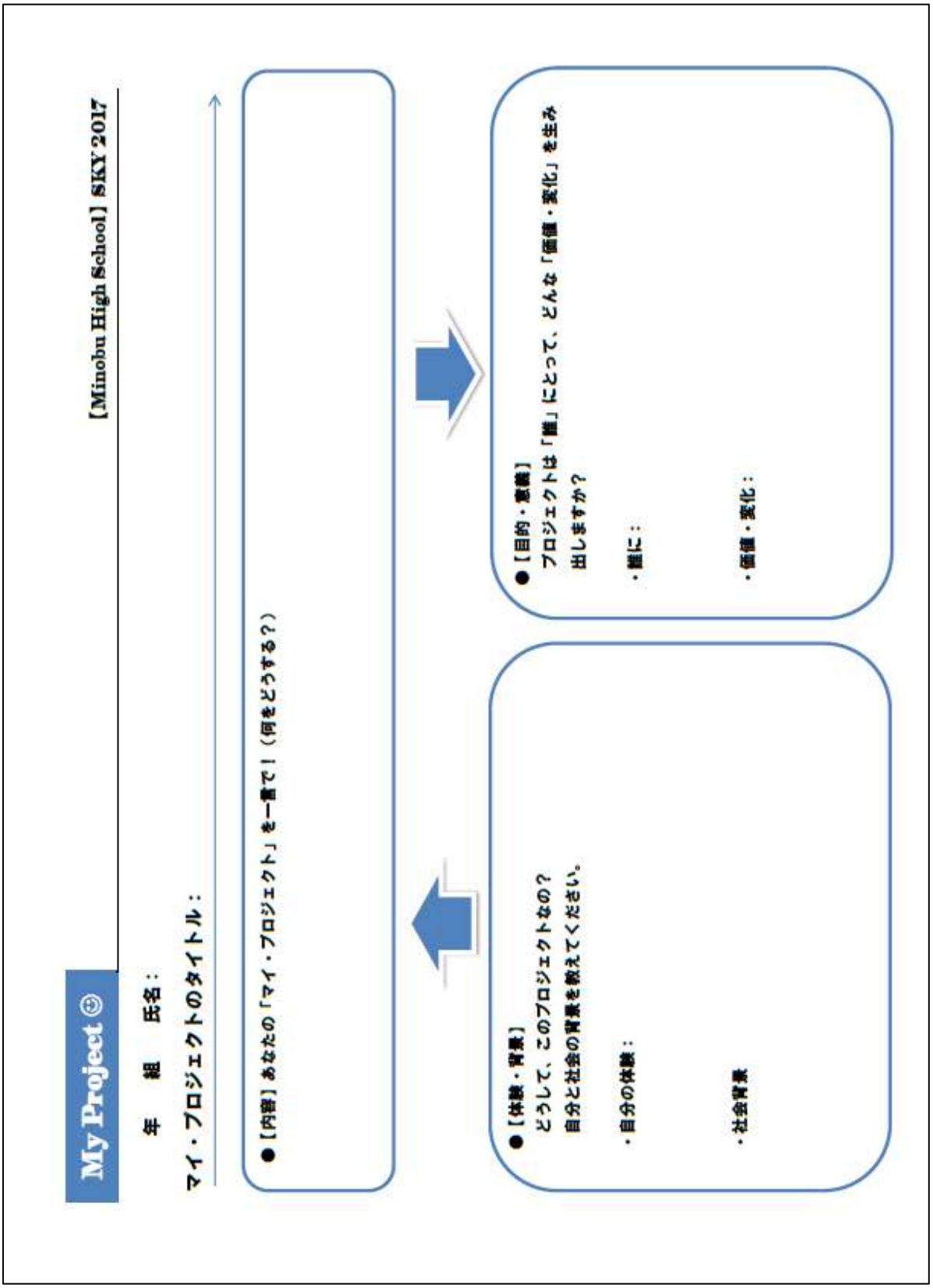
29 年 2 月の総合学科発表会で、SKY2016 の発表を聞く機会があったこともあり、新規生も活動内容については漠然と知っている様子であった。しかし、今から振り返ると、最終的に取り組んだ内容だけでなく、そこに到達するまでの背景や経緯、そしてどれくらい活動に時間を費やしたかなど、よりリアルな説明があった方が、新規生も今年度の見通しを持つことができたのではないかと感じる。講義②では、「My Project」というワークシート（参考 1 を参照）を使用して、自分が取り組みたいと思う活動について、ブレインストーミング及びカテゴリ化を行った（次ページ参照）。

エ 大学教員のアシスタント状況

大学教員の参加はなかったが、今回生徒たちから出た案を大学側へ報告し、第 4 回の講座に向けて準備していただいた。

| カテゴリ | 内容 |
| --- | --- |
| 教育・子ども | ・小中学生への勉強・部活・放課後アシスト<br>・身延町のヒーローを作る→ e.g. 身延戦隊、身延ライダー<br>・子どもが遊べる場所を作る　→ e.g.　グランドなど |
| 医療・介護 | ・お年寄りとのコミュニケーションの機会を増やす<br>・身延町大運動会<br>・介護の充実 |
| 自然 | ・自然保護クリーン活動・ボランティア<br>・防災・人災シェルター |
| 観光 | ・身延町の観光（昨年度からレベルアップ）<br>・身延町と夜空と私　→ 身延町の夜空を多くの人に見てもらう |
| 都市計画 | ・大きなショッピングモールを誘致<br>・身延町ライトアップ（西嶋のように）<br>・空き家活用　→ e.g. キャンプ　民泊など<br>・身延町のメインストリートを作る<br>・地産地消（内部経済）<br>・Little Tokyo in 身延 |
| 動画 | ・動画制作（昨年度からレベルアップ）<br>・Youtuber になる！ |

参考資料１　第３回の講座で使用したワークシート



（４）第４回　６／２１（水）

ア 授業のテーマ　　【今年度の事業内容を考える②】

県立大学の教員の前で自分が取り組むプロジェクト案について発表し、実行可能性などについてアドバイスをもらい、7 月末の県立大学での発表に向けた指針を得ることを目的とした。

イ おおまかな授業の流れ

①ワークショップ１「今年度の事業案発表会①」

②ワークショップ２「県立大学の教員紹介及びアドバイス」

講師：二戸麻砂彦　伊藤　智基　　（山梨県立大学）

ウ 授業の概況と生徒たちの様子

今年度初めて県立大学の教員が身延高校へ来校された。初めて会う生徒もいたため、若干緊張した雰囲気の中で事業案の発表が始まった。第 3 回と第 4 回の講座の間に行ったミーティングなどを経て、第 1 段階として以下の表のように各生徒が取り組みたい活動が絞りこまれた。

| カテゴリ | テーマ | 氏名 | 内容 |
|---|---|---|---|
| 動画 | 動画による身延町の活性化　（継続） | 深澤　圭 | 昨年から引き続き、身延町を PR できる動画を制作し、可能であれば Youtube 上へ公開する。 |
| 観光 | 広報活動　（継続） | 對馬　琴梨<br>中山　樹 | 昨年から引き続き、ポスターで身延町のコンテンツを紹介し、その結果を発表する。 |
| | 新商品開発（新規） | 望月　奏汰 | 身延町の名物を活用した新商品の開発・検証。 |
| 医療介護 | 身延町大運動会（新規） | 近藤　佑生<br>藤田　哲平<br>酒川　紋乃 | 地域のつながりが弱体化している中で、町内の異なる世代の人々がコミュニケーションを取りながら、交流できるような大運動会を年 1～2 度程度実施する。 |
| | お年寄りと語ろう（新規） | 高橋　倫 | 高齢化が進行しているので、孤立防止や認知症予防のため、身延町内の公民館などで、お年寄りと若者が話す機会を設ける。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 都市計画 | スーパーマーケットの建設・提案（新規） | 丹沢　茉穂 | 身延町には、子どもや高齢者にとって便利なお店が少ないと感じるので、両者にとって利便性の高いスーパーマーケットを提案する。 |

エ 大学教員のアシスタント状況

発表終了後に、伊藤先生より活動内容の具体化に向けてアドバイスをいただいた。伊藤先生は、生徒のプロジェクトを経営マネジメントの視点から捉え、次の重要な 5 点を指摘された。第 1 に、高校生の強み、高校教員の強み、大学教員の強みが何かをよく考えて、それらが重なるような形で地域貢献していくこと。第 2 に、自らの活動のミッションを考え抜き定義すること。第 3 に活動の手を広げ過ぎてはならないこと。第 4 に、その人の得意なこと、優れた部分に注目すること。最後に戦略として先行事例を模倣することである。また、伊藤先生は、同じく県立大学と高大連携している県立甲府城西高校の活動内容についても紹介してくださった。

**（５）第５回　７／25（火）**

ア 授業のテーマ　　【今年度の事業案発表会③】

前回の伊藤先生からのアドバイスを受けて、5 つの事業案が 3 つへと統廃合された。今回の講座の目的は、年度後半の活動に向けて、それらをより具体的に提案・検討することである。また、今回の発表は、普段生徒が訪れることができない大学の施設見学や雰囲気を知る意味を兼ねて県立大学で実施させていただいた。

イ おおまかな授業の流れ

①事業案発表会

1　QR コードグループ

発表者：藤田 哲平、對馬 琴梨、近藤佑生、中山 樹

2　動画グループ

発表者：丹沢 茉穂、深澤 圭、酒川　紋乃、高橋 倫

3　身延町紹介カードグループ

発表者：望月　奏汰

②学内施設見学

ウ 授業の概況と生徒たちの様子

①QR コードグループ

前回より新たに 2 名が合流し、昨年度までの活動を継承し発展させていくことにした。昨年度の成果として、QR コードは観光客から一定の興味を引くことができる媒体であることが分かり、外国人からのアクセスもあった。しかし、高齢者が利用しにくい、RESAS を活用して設置場所を検討しても、実際の施設では人目につきにくい場所に設置してあるなどの課題も得られた。それらを受けて、今年度は、日本語、英語、中国語に対応した多言語化を進めることや、より人々の関心を引くポスターのデザインや設置場所を工夫することを提案した。

県立大学の安藤先生からは、QR コードを利用する英語話者にはどのような人がいて、どのような情報が欲しいのかをよく吟味するべきであるとのご指摘をいただいた。伊藤先生からは、前回と同様に、自分たちでできることとできないことを把握し、高校生の強みが生きるような形でプロジェクトを進めた方がよいとのご指摘をいただいた。

②動画グループ

前回より新たに 3 名が合流し、活動を継承・発展させていくことになった。昨年度は、動画の制作までで活動が終わってしまったので、今年度は制作した動画を Youtube や SNS などにアップロードすることを目標に設定した。暫定案として、身延町紹介動画、CM のパロディー動画、どんぶり街道動画、みのぶまんじゅう動画の 4 種類を制作していきたいと提案した。

大学教員からは、生徒たちが見せたい動画と動画の視聴者が見たい動画が違うこと、どのような人を想定してどうのように動画を見せるのか、外部の人が知らない身延町の魅力を発信することなどを考えるようなアドバイスをいただいた。二戸先生からは、具体的に高校生目線の動画のイメージが共有できなかったため、夏季休業を利用して実際に動画を制作してみてはどうかとのご指摘をいただいた。

③身延町紹介カードグループ

1 年生による新規アイデアの提案であった。内容は、身延町のよいところをより多くの人に知ってもらうために、身延町の魅力をカード化し、町内の色々な場所で配る、もしくは配ってもらうというものであった。カードについて、大きさは名刺サイズ、素材は身延町特産の和紙を使用し、観光サイトに誘導するための QR コードを貼り付け、裏面は英語表記にするとのことであった。

大学教員からは、身延町のどこでカードを配布するのか、実際の交渉はどのように行うのかを明確にすること、また夏季休業中に実際に観光施設などで取材やインタビューを行うことなどのご指摘をいただいた。

すべての発表が終わったところで、伊藤先生より、レッドオーシャン戦略とブルーオーシャン戦略についての説明をうけた。前者は競争が厳しく、後者は競争が緩やかな環境のことを表す。自分たちがプロジェクトを進めていく際に、先行事例や競合相手の情報を調べて、自分たちの強みを最大限活かせるような分野で活動することの重要性をご教授いただいた。

最後に、大学内の施設見学および二戸先生の研究室を案内していただいた。二戸先生の研究室には、多くの文献や専門分野の資料が多くあり、生徒たちは興味深そうに眺めていた。また、学内のフリースペースで学習やグループワークを行う学生の様子を垣間見ることができ、自分が大学生活を送るイメージが湧いたかもしれない。

エ 大学教員のアシスタント状況

上記のように、二戸先生、伊藤先生、安藤先生から多くの貴重なアドバイスをいただくことができた。生徒たちが答えに困る質問もあったが、それらを含めて次回以降の活動につながる課題を発見することができた。

（６）第６回　９／２０（水）

ア 授業のテーマ　　【各プロジェクト進捗状況報告会①】

県立大学での発表会および８月 25 日（金）のミーティングの課題を踏まえて、より具体化された形で各自のプロジェクトの進捗状況を確認することを目的とした。身延町紹介カードグループは、生徒が夏季休業明けに講座を離脱したことに伴い消滅した。

イ おおまかな授業の流れ

事業案発表会

１　QR コードグループ

発表者：藤田 哲平、對馬 琴梨、近藤　佑生、中山 樹

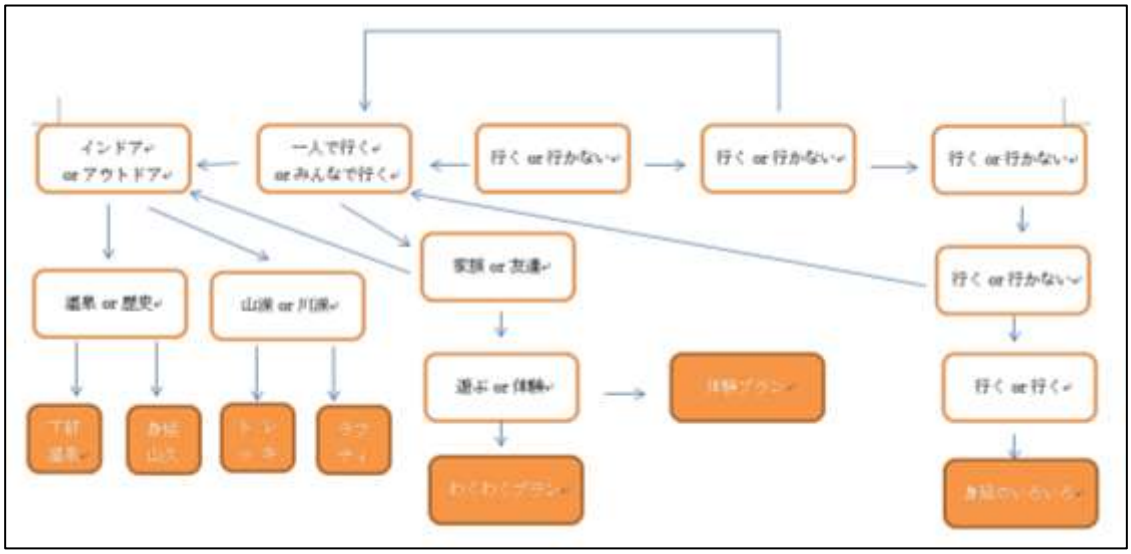
２　動画グループ

発表者：丹沢 茉穂、深澤 圭、酒川　紋乃、高橋 倫

ウ 授業の概況と生徒たちの様子

１　ＱＲコードグループ

夏季休業中にグループワークを行い、自分たちの力で身延町の観光地を紹介するウェブサイトを制作することに決めた。どのようなウェブサイトを設計するのかについて、身延町の魅力的な観光地やおすすめの体験活動を盛り込んだ以下のような設計図を用意してきた。引き続き、ウェブサイトの制作やポスターのデザインを進めるように促された。




2　動画グループ

7月末に、大学教員から実際に動画を撮影してみたらどうかというアドバイスを受けたため、夏季休業中に4名で「みのぶまんじゅうの四季（夏編）」の動画の撮影・編集を行った。内容は、みのぶまんじゅうと身延町の魅力的な場所を組み合わせて、両者をアピールするというものである。今回は、編集途中の動画の一部を視聴した。県立大学の教員が来校する10月の発表に向けて編集を続け、平行して2本目、3本目の動画の案を考えるように指導された。

エ 大学教員のアシスタント状況

大学教員の参加はなかったが、県立大学での発表会時にいただいたアドバイスを意識しながら、活動の検討を行った。

**（7）第7回　10／17（火）**

ア 授業のテーマ　　【各プロジェクト進捗報告会②】

前回の講義を受けて検討した結果以下のような三つの活動グループに分かれて活動することが決定した。3年生が受験対策のために講座を一時的に離れたため、2年生6名での活動体制になった。

イ おおまかな授業の流れ

進捗報告会

1　QRコードグループ

発表者：近藤　佑生、中山　樹

２　動画グループ

発表者：丹沢　茉穂、深澤　圭、酒川　紋乃、高橋　倫

ウ 授業の概況と生徒たちの様子

①QR コードグループ

今回、第 6 回の講座で提示した設計図を基に制作したウェブサイト及びそのウェブサイトに誘導するための QR コードを使用したポスター案を示した。実際に大学教員に QR コードを読み取ってもらい、QR コードからウェブサイトへの誘導が実際に機能することを確認してもらった。大学教員も含めて、高校生 2 名が自分たちの力で作り上げたものに素直に驚いていた。二戸先生からは、ウェブサイトのユーザーに頭を使わせておすすめの観光スポットに誘導する点を評価された。兼清先生からは、ポスターのデザインに関しては、制作の初期段階ではあったが、身延町についてのポスターであるということが分かるように身延の町章などを利用することなどを勧められた。

また、昨年度と同様に、ユーザーの情報を収集するためグーグルアナリティクス（Google Analytics）の使用を検討していたが、昨年度は業者に委託していたためあまり生徒に蓄積が残らなかった。その旨を兼清先生に相談したところ、県立大学でグーグルアナリティクスについて学んでいる依田さん（4 年生）を紹介していただき、アドバイスをもらうことができた。依田さんには、翌年 2 月までメールや電話などを通じてプロジェクトの完成にむけて協力していただいた。

②動画グループ

「身延町の四季（夏編）」を上映した。兼清先生からは、映像制作の常識に囚われないおもしろい作品であるとの評価をいただいた。しかし、映像制作の観点から、三脚の使用、被写体と一緒にカメラを動かすと最初より最後の場面が印象に残るがカメラを固定すると印象は均等であること、映像のサイズ感（ロングショット、ミドルショット、クローズショット）による映像の見え方などについてご指導いただいた。また、動画編集の観点からは、楽曲や台詞の使用、楽曲を使用する際の著作権に留意すること、インスタグラムを使用する場合はハッシュタグを取り入れることなどのご助言をいただいた。

また、2 本目以降に撮影する動画案についてもご指導していただいた。グループメンバー内で次に撮影したい動画の考えに隔たりがあったため、兼清先生より、生徒 1 人 1 人が監督となり、動画の企画、撮影、編集、アップロードを行うことを提案された。

エ 大学教員のアシスタント状況

二戸先生と兼清先生に足を運んでいただいた。また、大学 4 年生の依田さんにも参加していただいた。動画制作が動き出し、映像制作がご専門の兼清先生からは、動画の企画から編集まで多岐にわたってアドバイスをいただいた。また、生徒たちとコミュニケ

ーションをよくとり、彼らの疑問や考えを引き出して理解を促す方法は巧みであった。

**（８）第８回　１２／５（火）**

ア 授業のテーマ　　【各プロジェクト進捗報告会③】

各グループがそれぞれの活動内容に応じて、進捗状況を報告。県立大学の先生方に指摘や助言を頂く。

イ おおまかな授業の流れ

進捗報告会

１　QR コードグループ

発表者：近藤　佑生、中山　樹

２　動画グループ

発表者：丹沢　茉穂、深澤　圭、酒川　紋乃、高橋　倫

ウ 授業の概況と生徒たちの様子

①ＱＲコードポスターグループ

ポスター及びウェブページのデザインを作成。全体的に良くできていると評価いただく。文言やＱＲコードへの誘導についてご助言をいただく。もう少し簡単にゴールできるようわかりやすく、ＱＲコードの数を減らしたほうが良いとご助言をいただく。配置場所については、身延町内に関わらず、広く設置をしたいという希望があり、県立大学の先生のご協力を得て、県内の観光客が多く集まる場所をＲＥＳＡＳを参考に選び設置することを検討することになった。

②動画グループ

兼清先生からいただいた１人１人が動画の監督になるという提案を受けて、以下の３つのグループで３種類の動画を制作していくことになった。

丹沢　茉穂、酒川　紋乃：「イルミネーション動画」

深澤　圭：「みのぶまんじゅう食べ比べ動画」

高橋　倫：「ニュース MINOBU」

「イルミネーション動画」は、身延町西嶋地区のイルミネーションを見ながら、女子高校生がみのぶまんじゅうを食べるという内容である。西嶋のイルミネーションの

美しさを際立たせるためにストップモーションを取り入れ、ひとつひとつの写真に注目が集まるように工夫していく。

「みのぶまんじゅう食べ比べ動画」は、普段常温で食べることの多いみのぶまんじゅうを、レンジで温めたり、冷凍庫で凍らしてたべたりする様子をユーチューバーのようなアレンジで紹介するという内容である。

「ニュース MINOBU」は、「何気なく」をコンセプトにした動画である、ニュース形式の動画の中で、みのぶまんじゅうを何気なくアピールし、視聴者に何気なくみのぶまんじゅうについて知ってもらうことを目的とした。

エ 大学教員のアシスタント状況

今回も専門的な視点から兼清先生にアドバイスをいただいた。QR コードグループは、文字の配置や大小などポスター内のレイアウトについて、動画グループは人が集中して見ることができる動画の長さなどについて指導していただいた。

**（９）第９回　１／１６（火）**

ア 授業のテーマ　　【各プロジェクト進捗報告会④・まとめ】

各グループがそれぞれの活動内容に応じて、進捗状況を報告。県立大学の先生方に指摘や助言をいただいた。

イ おおまかな授業の流れ

進捗報告会

１　QR コードグループ

発表者：近藤　佑生、中山　樹

２　動画グループ

発表者：丹沢　茉穂、深澤　圭、酒川　紋乃、高橋　倫

ウ 授業の概況と生徒たちの様子

①ＱＲコードグループ

冬期休業中に作成したポスターの最終チェックを行った。休業中に実際のポスターサイズで QR コードの印刷を行ったが、光の反射、撮影角度、スマートフォンの機種によって中央の QR コードを読み込めない現象が続出した。その事態を回避するため

に、ポスター右下隅に未加工の QR コード（4×4cm 程度）を貼り付ける対応を施した。ポスターの設置場所については RESAS を活用して、観光客の訪問数が多い県内の身延山、ゆばの里、ほったらかし温泉及び身延町への訪問者数が多い富士宮駅の 4 箇所を検討していた。しかし、富士宮駅構内での設置に関しては 1 週間の掲示に 1 万円の費用がかかるため断念した。

②動画グループ

1 人 1 人が動画制作の監督になるというテーマの下、以下の 3 つの動画を制作した。

深澤　圭：「みのぶまんじゅう食べ比べ動画」

丹沢　茉穂、酒川　紋乃：「イルミネーション動画」

高橋　倫：「ニュース MINOBU」

エ 大学教員のアシスタント状況

作成した動画について県立大学の兼清先生からアドバイスをいただいた。特に、高校の教員では難しい動画編集に関連する専門的な観点から指導していただいたため、作品を更にブラッシュアップすることができた。また、作成した動画の YouTube 上で公開するにあたり、「みのぶまんじゅうチャンネル」や「どんぶり街道チャンネル」など公開するチャンネル名の工夫をするようなアドバイスもいただいた。

## ４　総括

### （１）参加生徒の感想

ア　この講座に参加して成長したことや新しく身につけた力や知識について

・コミュニケーション能力が向上したと感じる。今まで知らない大人と話すのがとても嫌いだったけれど、嫌でも口をきかなければ何もできないので少しずつ話していくようになった。最近では普通に大人と話せるようになった。

・人と話すときに代名詞（それ、あれ）などをあまり使わずに話すことを意識するようになった。今年度、動画班は１人１人が監督として動画の制作に取り組んだが、その取り組みにより責任感が大きくなり、報告・連絡・相談することが多くなった。

イ　この授業を通じて、あなたが最も学んだことについて

・自分が思った以上に身延町には良いところがあって、動画班として活動していくのには、動画の題材が沢山あって助かった。

・ここに書けないくらい学んだことがあります。でも最も学んだことは「何でも楽しくすること」です。今年度の高大連携講座を取り組み始めた頃、私も活動していてどっちかと言ってみたら楽しくなくて［中略］成果も全然出ませんでした。でも自分たちが楽しいように活動すればするほど楽しく成果も好評でした。だから楽しんですることは自分にとってはプラスなんだと思いました。

ウ　講座の内容で難しかった点について

・何をするかを決めるまでは宙ぶらりん状態だったので、その状態から抜け出すまでがある意味大変だったし、何をしたら地域貢献になるのかを考えるのがすごく難しかった。動画の編集も最初はすごく難しかったし、すごく苦労した。自分たちが納得しても、他の人が納得してくれず、どうやったら納得してくれるのかを考えるのが一番難しかった。

・やはり最初に高大連携で１年間何をやっていくか決める時、新しく何か始めたいって時に細かくどのようにどのようなことをやりたいか決めることが苦でした。だから過去の活動を引き続きやっていきたいと思った。先生方や役場の方々などから質問いただくのに、難しい質問に対して答えるのが難しかった。（これは私だけだと思うが）言葉をあまり知らないっていうのもあると思うので・・・

### （２）今年度の成果・課題（QR コードグループ・動画グループ）

今年度の活動テーマは、「昨年度の活動に自分たちの力だけで」というものであった。より具体的には、昨年度の QR コードおみくじ・ゲーム両班と動画グループのアイデアや経験を引き継ぎ、昨年まで外部に委託していたウェブサイトの制作などを高校生の力によって、その中で以下のような成果と課題が得られた。

| | 成果 | 課題 |
|---|---|---|
| QRコード | ○高校生の力だけで観光ウェブサイトを制作することができた。<br>○ウェブサイト用の写真撮影の中で、町内を視察し、身延町をより知ることができた。<br>○RESAS を活用してポスターの設置場所を検討・設置することができた。<br>○グーグルアナリティクスを使用し、QR コードを読み取った人の情報を知ることができた。<br>○大学生とコミュニケーションをとり、疑問を解決することができた。 | ○アップル社の iPhone を使用した場合（グーグル以外のブラウザを使用した場合）、グーグルアナリティクス上で上手く反応が確認できないことが分かった。<br>○別々の QR コードや識別用の URL を使用して観光ウェブサイトに誘導しても、どの地点から読み取ったのかの識別が困難であった。<br>○観光ウェブサイトの多言語化に取り組む時間が確保できなかった。 |
| 動画 | ○生徒１人１人が、動画制作の監督として、企画、撮影、編集、評価、改善などの一連の過程を経験することができた。<br>○動画制作の中で町内を視察し、身延町の魅力を発見することができた。<br>○Youtube 上へ制作した動画をアップロードすることができた。 | ○撮影前の企画の段階で、動画のストーリーを詰められず、編集に必要なカットを後から撮影することになった。<br>○生徒が面白いと感じる動画をただ Youtube 上に動画をアップロードしても、再生回数は単純に増えないことが分かった。 |

上記の中でも、今年度の一番の成果だと担当者が感じた点は、一見難しいと思われることでも実際に挑戦してみるとそこまで難しくないということを示すことができたということにつきる。ウェブサイトや動画を制作した SKY の生徒は、決して情報に関する特段の専門知識を有している訳でもない普通の高校生である。しかも、他に主として活動する部活動があり、講座には副業的に参加している生徒たちである。いわんや、大人ができないわけがないだろう。彼らの活動は完璧と言うにはほど遠いものがあるが、やる気さえあれば「普通」の人でも何らかの形で地域に貢献できることを示した意義は大きい。このような小さな創発の積分が地域の未来を左右するのではないかと感じる。

**（３）今年度の課題（高大連携講座の運営）**

今年度 1 年間の高大連携講座を担当者の目線で振り返ると、主に 3 つの課題が浮かび上がる。第１に、講座の運営体制に工夫が必要である。その理由の１つとして、県立大学と身延高校の教職員の多忙さが挙げられる。当然のことであるが、両校の教職員は連携講座以外にも授業や講義、部活動などの多くの通常業務を抱えている。両者とも活動へ寄せる意欲や期待は大きいのであるが、放課後につきっきりで指導に当たる時間の確保は現実的に難しい。そうすると、生徒の主体性や自主性に頼らざるを得なくなるが、SKY メンバーの大半が他の部活動や生徒会に所属しているため、大会や学校行事と重な

る時期の活動自体が難しい。冒頭でも述べたが、本講座の主題の 1 つは主体的に行動できる人材を育成することだが、主体性を求めることができる環境に生徒も置かれていないという現状は、担当者として言及しない訳にはいけない。

第 2 に、活動内容が（あまりにも）高度かつ専門的になりすぎているきらいがある。今年度の QR コードグループを例にとると、グーグルアナリティクスを使用して QR コードの読み取り場所によって利用者の情報を識別する方法を高校教員が指導することは非常に困難であった。高校教員が指導できない部分を補完していくのが大学教員の役割であると思うが、グーグルアナリティクスを専門にしている教員は見つからないようであった。今年度は、偶然、グーグルアナリティクスの研究をしていた県立大学の 4 年生にアドバイスを求めることができたが、来年度以降必ずしも高校と大学の強み・弱みを補完していくことができるかは分からない。加えて、新規 SKY メンバーの募集に際して、高大連携講座ではデータ解析や動画編集を行っていると本校の生徒が聞くと、その多くは自分にとっては内容が難しいと距離を感じ、興味のある生徒も実際に参加するとなるとハードルが高くなってしまったかもしれない。事業の継続性を考えると、活動内容に工夫をして講座の裾の尾を広げていかなければならない。

第 3 に、年間の活動計画も工夫が必要である。まず、前章で示した今年度の活動は以下のような表に整理することができる。

| | 日時(時限) | 活動内容 | 活動目的 |
|---|---|---|---|
| 1 | 4/19(水)<br>高校教諭 | オリエンテーション<br>・自己紹介<br>・今後の講座内容の概要説明<br>〔宿題〕<br>・３０歳と５０歳の時どんな暮らしをしているか？ | 自己紹介<br>講座の概要説明 |
| 2 | 4/27（木）<br>高校教諭 | 講義①：身延町、このまま進むとどうなる？<br>〔宿題の発表〕<br>・３０歳と５０歳の時どんな暮らしをしているか？ | 本年度の事業案の議論・決定 |
| 3 | 5/17（水）<br>高校教諭 | 講義②：昨年までの取り組みを報告<br>〔宿題〕<br>・今年度の事業案を考える① | |
| 4 | 6/21（水） | 講義③：今年度の事業案を考える② | |
| 5 | 7/19（水） | 県立大学での発表会<br>・今年度の事業案を考える③<br>・フィールドワークの準備と日程の確認と報告 | |
| 6 | 8 月中 | フィールドワークなど | |
| 7 | 9/20(水) | 講義④：各プロジェクト進捗状況報告会① | プロジェクトの進行 |
| 8 | 10/1（水） | 講義⑤：各プロジェクト進捗状況報告会② | |
| 9 | 12/2（水） | 講義⑥：各プロジェクト進捗状況報告会③ | |
| 10 | 1/16（火） | 講義⑦：各プロジェクト進捗状況報告会④・まとめ<br>・評価 | |
| 11 | 3／27（火）<br>3／28（水） | ・県立大学での研究報告会<br>・身延町への活動報告会 | まとめ<br>発表 |

4 月のオリエンテーションに続く 5 月から 8 月の 4 ヶ月間は、今年度の活動テーマを決めることに主眼を置いて活動した。昨年度までの活動テーマには固執せず、5W1H を意識させながら生徒の興味・関心に基づいたテーマを自由に考えさせた。しかし、結果として実際に高校生の興味・関心と実現性が重なり合う新規テーマを選出することはできなかった。高校教員側のスタンスとしては、敢えて生徒の考えた案を否定することはせず、生徒自身が活動の中で、高校生が実際にそれを行うことができるのかを判断させることにしていた。具体的に考えを突き詰めさせた結果、実現が難しいと生徒たちが気づくまでにかなりの時間がかかってしまった。プロジェクトに実際に取り組み出したのは 8 月である。議論などによってテーマを決めていくプロセス自体は決して無駄ではないが、28 年度同様、今年度もテーマ設定に少なくない時間を費やしてしまった。実際に活動に取り組むことができた期間は 3 ヶ月程度と非常に短く、ウェブサイトの制作や動画の完成度を高める時間が限られてしまった。また、活動時間の短さと関係があるかは分からないが、この期間の生徒の様子を見ていて「奇妙な成果主義」のようなものを感じた。よい作品を作りあげようとする気持ちよりも、怒られないための予防線として、「とりあえず動画を撮影した」、「とりあえずウェブサイトを作った」など、及第点を求める傾向が強く見られた。活動する時間に余裕が生まれれば、多少この傾向は改善できるかもしれないと感じる。

最後に、昨年度までの蓄積を十分に活用することができなかった。例えば、昨年度は動動画の作成に先立って「絵コンテ」などを活用し、動画のコンセプト、メッセージ、撮影の流れなどを事前に明確化してグループ内で共有を図っていた。しかし、今年度はメンバーひとりひとりが撮影の監督になったこともあり、動画のイメージが漠然としたまま撮影に臨んでしまい、当然撮影スタッフや教員とも共有されず、編集作業の際にも互いにアドバイスをし合う余地が残されていなかった。絵コンテを始めとした蓄積が上手く引き継がれていれば、今年度より効率的・効果的に活動することができたかもしれない。今年度、生徒は統計データの活用（RESAS）、ウェブサイト制作、グーグルアナリティクスの活用、ポスター制作、動画撮影、動画編集、ウェブサイトへの動画の投稿方法など、数多くの高度な知識・技能を習得した。来年度以降、活動テーマが変わったとしても、その「遺産」を翌年度以降の活動に取り入れるための工夫が必要である。

### （４）来年度以降の高大連携講座への示唆

今年度の成果と課題を踏まえて以下の点を来年度以降への示唆として提示したい。まず、来年度以降は、講座参加へのハードルを低く設定し、より多くの生徒が興味・関心を示すことができる活動を行うのが望ましいと思う。その際、山梨県立大学との全学協定を活用し、観光や動画以外にも活動テーマを広げることも考えるべきである。また、取り組むテーマを事前に選定しておき、5 月か 6 月には実際の活動に移行することができるように計画することも考えられる。今年度は、ちょうど生徒が高大連携の活動を面白いと思えるようになった時期に活動が終了してしまい、あと少し時間があればよいと感じた。更に、発表

活動や表現活動が多い本校の特性を活用することも、担当職員や生徒の負担を軽減する上で効果的であると考える。本校は、高大連携講座以外にも「産業社会と人間」の授業、インターンシップ、防災サマーキャンプ、ライフミュージアムなど、地域の人々や各種職業人と接する機会が多い。そして、それぞれの行事で模造紙による発表、レポートの作成、プレゼンテーションなど、自身の体験を表現する場面が多いので、既存の学校行事の枠組みを有機的に活用していくことで、生徒や教員の負担を軽減しながらも、高大連携活動をより充実させていくことも可能である。最後に、生徒のアンケートの中にもあったが、社会経験の少ない生徒にとって、他者を納得させるだけの具体性ある活動を考えるのは難しそうであった。また、昨年度と比較して今年度は大学教員や外部の方の講義やレクチャーなどが少なかった。来年度は、実際のプロジェクトを行う前に、過年度の活動以外の様々な先行事例や類似事例についてケーススタディを行ったり、生徒の知識と実際の活動の橋渡しとなるようなブリッジ活動を行ったり、短期集中型の活動ができればよいと考える。

末筆ながら、今年度本事業にご協力いただいた県立大学地域交流センター長二戸麻砂彦教授はじめ、兼清慎一先生、伊藤智基先生、安藤勝洋先生に心から謝意を申し上げたい。また、生徒だけでなく、本校の教職員からも、地域貢献に関する知見、講座の進め方や記録、映像制作やその PR 方法など様々な点で大いに勉強させてもらった。また、高校改革・特別支援教育課の小佐野景賀さん、後藤貴樹さん、小林俊一郎さんには大学とのコーディネート及び講座の運営をご支援いただいた。更に、身延町政策室の幡野弘さんと望月俊宏さんには身延町の取り組みを紹介していただいたり財政面でも多くのご支援をいただいたりした。併せて暑く御礼申し上げたい。